かの日の歌【二】

漢那浪笛

青空文庫

◉

音なき秋の空をながめて、
木の葉は淡き吐息(といき)をもらし、
色みな、悲しきメロディなり。

時のまに〳〵泣きすぐる風に、
調べはいたく、狂ひわなゝき、
自然の胸の痛みは、更に深し。

黄ばめる木の葉は、翼をふるひ、
暗をもりたる、谷をみおろし、
渦まきながら、果ては消えゆく。

◉

こゝちよき南の朝、

空は薔薇(ばら)色の絹をのべ、
いろ鳥の歌は、若かき恋のごとく、
珠(たま)の響きをもてふるへり。

眼ざめし軟風、払手柑の花咲く
泉のほとりに、たわふれば、
かぐわしき名香、四方に散じ、
草葉にむすぶ露も、はら〳〵と散る。

あわれ、ユウカリ樹の下に、
たをやの髪を手にまきて、
若かき恋の別れを告げし、曙も、
今は、浮刻(うきぼり)の如く、空にうつらふ。

◉

なぎたる海の如き小夜(さよ)なか。
香ひよき酒にさめて、
物すごき森の奥に、
極楽鳥の声をきくとき、
心は新らしき悲しみの眼をひらく。

南極星のなゝめに傾むき、
椰子の葉影にふるゝ頃まで、
色あせし唇に、「かの日の歌」をなせど、
たへなる音もなく、息は糸のごとく衰ろへ、
果敢なき涙して、喜びは吾れをさかりゆく。

◉

涙ぐみたる植民地の空。
あぢきなき労働を終へて、

榕樹の影に息ふ黄昏(いこ　たそがれ)よ！

息ふかき鐘の音は、愁人の声を偲ばせ、
収穫(とりいれ)しさゝやかな穂束(ほづか)をながめて、
……かたパンを食ふに似たる生活(くらし)を思ふ。

青空文庫情報

底本：「沖縄文学全集　第1巻　詩※［#ローマ数字1、1-13-21］」国書刊行会
　　1991（平成3）年6月6日第1刷
初出：「琉球新報」
　　1911（明治44）年11月3日
※初出時の署名は「浪笛生」です。
入力：坂本真一
校正：良本典代
2016年12月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かの日の歌【二】

漢那浪笛

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/